

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 曾根原 玲菜

論 文 題 目

Predictive factors for massive hemorrhage in women with retained products of conception: a prospective study

(Retained products of conception (RPOC) における多量出血予測因子の検討)

論文審査担当者 名古屋大学教授

主 査 委員 山本 英子
名古屋大学教授

委員 今釜 史郎
名古屋大学教授

委員 内田 広夫
名古屋大学教授

指導教授 梶山 広明

論文審査の結果の要旨

Retained products of conception (RPOC) の多量出血予測因子について前向き研究を実施した。主要評価項目は Power Doppler color scoring (PDCS) の有用性、副次評価項目は他の因子の同定とした。51例のうち16例(31.5%)に多量出血を認めた。PDCS1または2は全例多量出血を認めなかったが、PDCS3または4は33例中16例(48.5%)に多量出血を認めた。多変量ロジスティック回帰分析により、PDCS、ART、Hb のオッズ比 [95%CI] (P 値) は、それぞれ 22.39 [2.25 - 3087.92] ($P= 0.004$), 5.72 [1.28 - 33.29] ($P= 0.022$), および 4.24 [0.97 - 22.99] ($P= 0.056$) であった。さらに、決定木法においても PDCS が最も有用な因子であり、ART と Hb も予測因子となる可能性が示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 外科的介入の適応は、多量出血の定義（活動性性器出血かつ、意識消失、ショックインデックス >1 、Hb <10 g/dl のうち少なくとも一つを満たす）を満たした場合とした。現時点ではエビデンスに基づく RPOC の治療プロトコールは確立されていない。
2. 妊娠終了から多量出血までの期間の中央値は 32.5 日であった。本研究の対象症例には、分娩時の多量出血により分娩直後に凝固異常を来した症例は含まれるが、RPOC と診断される前に正常化が確認されている。このため、凝固異常が原因で多量出血を呈した症例が含まれる可能性は極めて低いと考える。
3. 癒着胎盤は分娩後異常出血のリスクとなり、ART 妊娠は癒着胎盤や分娩後異常出血リスクと関連するとの報告がある。本研究は初めて RPOC による多量出血リスクと ART の関連を報告した。今後のさらなる検討により、癒着胎盤と RPOC の関連が明らかとなる可能性がある。
4. RPOC の発生頻度は、正常産の約 1%、流産ではより頻度が高い可能性があると報告されている。
5. 待機的管理とは、1 週間から 2 週間ごとに外来通院し、性器出血等の臨床症状、血液検査 (Hb、 β HCG)、経膈超音波検査 (PDCS、最大径) 所見を確認しながら、注意深く経過観察することを指す。多量出血を呈した場合は、可及的速やかに外科的介入を実施できることを前提としている。

本研究は、RPOC の管理プロトコールを確立する上で、重要な知見を提供した。以上の理由により、本研究は博士 (医学) の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	曾根原 玲菜
試験担当者	主査 山本 英子		副査 ₁ 今釜 史郎	
	副査 ₂ 内田 広夫		指導教授 梶山 広明	
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 外科的介入の適応について2. 凝固異常が多量出血の原因である可能性について3. 胎盤癒着が出血リスクとなる可能性について4. RPOCの発生頻度について5. 待機的管理について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、産婦人科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				